

現代日本の礼拝空間の設計論にみる境界の演出手法

奥山研究室 15_11582 花田 昌 (HANADA, Aki)

1.序 建築は内と外の境界をつくるものであるといえる。特に儀式や礼拝を行う場である宗教建築は、聖と俗や彼岸と此岸などの宗教的世界観が投影されたものであり、このような日常と非日常の境界が様々な演出されてきた。こうした宗教的儀式を行う礼拝空間の設計論からは、建築家が日常と非日常の間の境界をいかに演出しているかを読み取ることができる。そこで本研究では、礼拝空間*1の設計論にみられる境界演出に関する記述について検討することで、空間の境界演出に関する建築家の思考の一端を明らかにすることを目的とする。

2.境界手法と境界単位

2-1.境界手法と認識空間 資料とした設計論からは図1の分析例のように、宗教的もしくは死を意識した境界を作り出す手法を読み取ることができる。そこでこれを境界手法とし、境界手法によって分節される空間を認識空間とした。また認識空間は、礼拝を行う空間（【非日常】）と、そこに到るまでの空間（【日常】）に大別した。次に境界手法について検討した結果、境界手法は面的な境界を作る面的手法（〈面〉）と、空間的な広がりを持つ境界を作る立体的手法（〈立体〉）に大別した（図2）。さらに〈面〉は、2つの認識空間の間に門や壁などを設けることで境界を作るもの（〔境目〕）と、色や素材の対比や空間のかたちの違いなどにより2つの認識空間の性格の違いを強調するもの（〔差異〕）に分類した。

2-2.境界単位 認識空間の境界には、複数の境界手

法によって作られるものもみられた。そこで、境界ごとの境界手法の組合せを境界単位として検討した（図3）。その結果、境界単位を、〈面〉の組合せ、〈立体〉の組合せ、〈面〉と〈立体〉の組合せに分類した。〈面〉の組合せと〈立体〉の組合せは境界手法が1つのものが多く、その中でも壁によって境界をつくるものと、廊下によって境界を作るものが多くみられた。

3.礼拝空間の境界の演出手法

前章で検討した境界単位の組合せから、資料ごとの境界演出の手法を境界モデルとして図1のように図化した。本章では、境界モデルの性格について検討する。

3-1.境界単位の組合せにおける境界手法の数の偏り まず境界モデルには、1つの境界単位で構成されるものと複数の境界単位で構成されるものがみられた（図4）。次に複数の境界単位を持つものにおいて、各境界単位に含まれる境界手法の数に着目したところ、境界手法の分布に偏りがみられた。そこで手法の数に偏りがあるものを『強調あり』、偏りが無いものを『強調なし』として捉えた。さらに『強調あり』は、【非日常】の直前の境界単位に境界手法の数の偏りがあるもの（〔直前〕）と、それ以外の境界単位に数の偏りがあるもの（〔途中〕）の2つに分類した。

3-2.礼拝空間の境界演出の型 次に前節で検討した境界単位の組合せと、2章で検討した境界手法の組合せから、礼拝空間の境界の演出手法について検討した（図

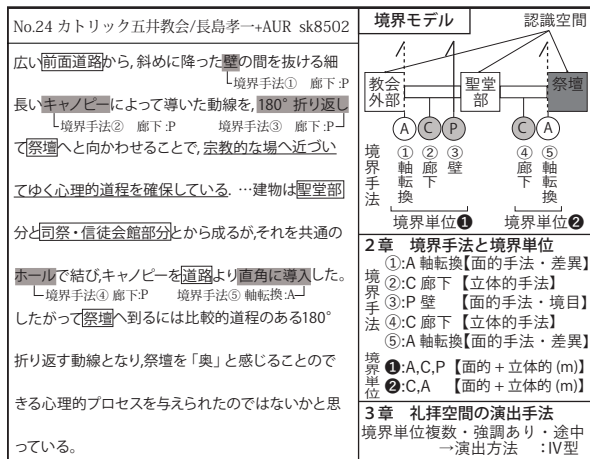


図1.分析例

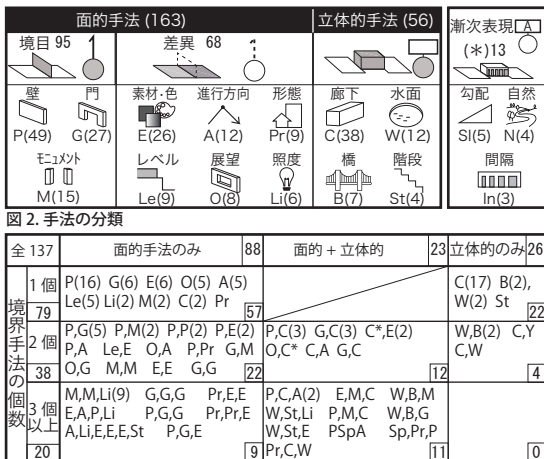


図3.手法の組み合わせ

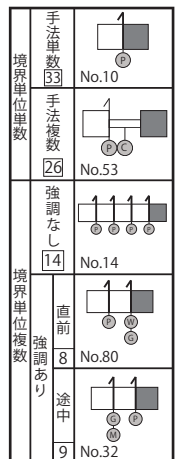


図4.境界単位の組合せ

5)。まず、境界単位単数において、〈面〉のみで構成されるものと〈立体〉のみで構成されるものは境界手法が単数のものが多くみられ、壁によって境界を作るものと廊下によって境界を作るものが最も多くみられた。これらは1つの手法で【日常】と【非日常】の境界をつくる際の代表的な手法として捉えられる。また、〈面〉と〈立体〉の組合せによるものは【非日常】の直前の手法が〈立体〉となるものが多くみられた。

次に、境界単位が複数のものにおいて、〈面〉のみで構成されるものは『強調なし』が多くみられ、それらの境界手法の内容の内訳をみると、同一の境界手法を反復して用いるものが大半を占めた。また、〈面〉と〈立体〉の組合せによるものは『強調あり』が多くみられ、さらに詳しくみると、【非日常】の直前の手法が〈面〉のものでは〔途中〕が多いのに対し、【非日常】の直前の手法が〈立体〉のものでは〔直前〕が多くみられた。これは、〔直前〕か〔途中〕かにかかわらず、立体的手法と面的手法の境界単位が『強調あり』の手法として積極的に用いられていることがわかる。

先ほど、1つの手法で【日常】と【非日常】の境界をつくる際の代表的な手法として捉えた壁と廊下について、それぞれ、境界単位を複数持つもののうち、【非日常】の直前にある手法に含まれている割合を検討した(図6)。ここから、壁・廊下ともに境界単位が単数のものに比べて、複数のものにおける割合が小さくなっていることがわかる。

4. 結 以上、礼拝空間の設計論を対象に、境界の演出手法について検討した。その結果、日常と非日常の間に壁によって明快な境界をつくるもの、廊下によってそれらをなめらかにつなぐもの、同一の手法を反復するもの、様々な手法を用いながらも、非日常の直前に境界を強調するもの、直前を緩やかにつなぐものといった境界の演出手法の典型を見出した。これらのことから、建築家が礼拝空間を設計する際、非日常の直前か否かに関わらず立体的な建築操作を配置する位置に境界を強く認識させようとする建築家の境界に対する思考の一端を明らかにした。

注1) 新建築に掲載された斎場・納骨堂・霊園・位牌堂などの死やその供養を扱う慰霊建築と宗教建築の言説のうち、精神的な意図で境界を作り出しているを読み取れるものと対象とする。

		手法の組み合わせ			
		面的手法のみ (39)	面的手法+立体的手法 (30)	立体的手法のみ (18)	
		非日常空間の直前が面的手法 (13)		非日常空間の直前が立体的手法 (17)	
境界単数の数	手法単数	10 P 59 P 86 O 16 P 63 P 19 Li 41 P 72 P 74 Le 42 P 77 P 58 G 48A P 79 P 67 E 52 P 81 P 62 A 56 P	15 P,C,A 76 C*,E 85 W,St,Li 66 P,W	23 G,C 1 P,C 55 G,C 46 P,C 83 G,C** 29 E,M,C 7 O,C* 48B E,C* 3 E,C	2 C 47 C 9 C 54 C 60 C 43 C* 65 C 73 C* 68 C 35 B 30 C 57 B 33 C 38 W
	手法複数	6 P,G 12 P,P,E 13 P,G,G 27 P,E,A,Li 28 P,M 37 E,E 20 P,E 18 E,E,Pr	22 C/A 25 G/C/O,G,P,P 71 C/O	82 M/W	78 C,W 84 W,B
	強調なし	4 A/A 36 P/A/O 5 Le/Le 40 P/E 8 Li/P 14 P/P/P/P 26 P/P 69 E/E/E/E	44 Pr/C,Pr,P	51 Pr,Pr,E/A,Li,E,E,E,St 75 G/W,B 45 G/P/P,Pr/P,Pr,C 17 P,G/W,B,M/E/P,M,Pr,C 34 C/M,W 80 P/G,W	49 C/St 70 C/C
境界単位の数	直前	11 G/G/Le,E/M,M,Li	21 Le/G,B,G,M/Le 53 Le/G,W,B/O/C/Le/P,P 24 A,C,P/C/A 39 P,C,A/W,St,E/P,M 50 Le,C/O,A/M	31 P,G,E/E/C	A,B 認識空間 : 非日常 同じ境界描写内の手法の区切れ 認識空間 : 日常
	途中	32 G,M/P 61 G,G,G/M,M 64 G,G/M			A/B 境界 : 差異 同じ作品単位内の手法の区切れ 立体 漸次(*)
31	17	9	5	1	2

